

02 白馬曇天

高崎でイコちゃんのクラリネット演奏会がある。5月には行けなかったから今度はどうしてもと思った。高崎は我が家から高速をつかって1時間で行ける。日帰りも可能ではあるが、9時に終わって暗いなかを車で帰るのは60歳の婦人には少し荷が重い。一晩とまった方が安全である。それでは朝帰ることになるが、何かもったいなさが残る。高崎から長野や新潟が1時間でいける。

決まったのは予て思っていた白馬行きであった。北信濃の5岳は何時も行っている。1時間長野に近いから、1時間遠くへ行く。そんな理屈で北アルプスへの道をとることに決めた。

高崎のモーツァルト（8月7日）

高崎で5時に西尾夫妻と会う約束にあわせ、3時前に家をでる。所沢で高速に入った途端に事故の始末中とか、大変な渋滞にであった。幸い事故の場所が所沢入り口から5分と離れていなかったもので、大きな時間のロスにはならず、4時半には高崎のホテルワシントンについた。西尾夫妻は既にきていた。久しぶりに4人揃ったから食事の1時間余はあっという間に過ぎた。

夫妻の長女、西尾郁子（イコちゃん）の演奏会は高崎市の文化施設の一つ、ギャラリーコアホールであった。今様に洒落た円形劇場で、雰囲気は良い。しかし人々の会話を聞いていると残響が少なく、多目的ホールだとわかる。舞台左右の壁面に吸音ボードが入っているようだし、天井までの距離が普通のこの種の劇場より高い。客席は500余りだから室内楽にはいいのだが。

女性だけの弦楽四重奏が始まった。モーツァルトの有名なk 136のディベルスマンであり、楽しめる筈だった。音がでた途端に心配が現実化した。デッドであり、弦の音に艶がない。第一ヴァイオリンがカサカサして聞こえ、セロも剥出しである。この二人が全く違った音楽性をもっているらしく、何とも落ち着かない音楽となった。私はセロに好感をもったが、それにしてもお互いに相手の音楽が気にならないのだろうか。時間的には合っているのだから、それでいいといえそうなるが、プロの音楽家なら気にならなくてはならない筈だ。

テンポという言葉のカザルスらの難しい意味で使えば、テンポがバラバラである。カザルスやスターンがテンポ感とは時間を空間ではかる能力だ、とっていたのを思い起こすし、譜面通りよく弾けていてもテン

ポの感覚を全くもっていない青年がいる、という言葉も読んだことがあった。

そういった意味でテンポは最後までバラバラだった。セロに合わせれば絶対速度〔時計的速度〕は遅くなる筈だし、ヴァイオリンに合わせれば早くなる筈である。テンポ感を大事にすれば絶対速度が同じになる筈はない。無理に音を合わせている。つまり音は合っていて音楽がチグハグに流れたのだ。

フランセのクラリネット5重奏曲はイコチャン登場で彼女が中央に座ったから、まとめ役と思った。先日CDを買って初めて聞いた曲だから、細部まで注意は払えない。現代作品であるだけにリズムや拍子に変化があって楽しい。モーツァルトのように音色の違いが気になるような曲ではないのだろう。そういう意味でイライラ感が今度はない。流れるように、踊るように楽しく終わった。

成功である、と言いたいところだが、4楽章なのに1楽章のように感じたのだ。CDで聞いたときには第2楽章のスケルツァンドや第3楽章のグラーヴェは個性的な感じがした。シャレタ曲でも第3楽章はグラーヴェだ。それがどうしてグラーヴェとして印象に残らなかったのだろう。

理由はわからない。

休憩後のモーツァルトは1年前のコンチェルトでの成功があっただけに興味深く音の出を待った。

少し早い。テンポ感として早いのだ。今までたくさんの演奏を聞いたが、早い方だ。クラのリズムはいいし、音程も無難だから音楽は淀みなく進んだ。この楽章は憂愁を含んだものだが、そんなカケラもない。まあそうでも、それはいいと思って耳を傾けた。

しかし音楽が自然に流れない。イコチャンはダイナミックを替え、テンポも少しいじりながら演奏するが、ヴァイオリンもセロもそれに答えしてくれない。各人、それぞれが楽譜から感じ取ったものを音にしているようだ。簡単に言えばバラバラなのだが、音楽が合っていないというわけではない。

外見だけみれば美しい合奏になっていた。各パートの一つ一つの旋律を追っていると全体としての流れが感じられない。バラバラで、いらいらさえる。少なくとも頭のなかに何も残らない。この楽章はああだった、この楽章はこんな特徴があったという印象が不思議に残らない。プロの演奏ではなかなか経験しないことである。

例えとして思いついたのは女のお喋りである。女のお喋りは相手のいうことを耳のどこかに残しながら、自分のいいたいことを喋る。それかと言って少しは聞いているから話の間合いや速さはあう。(敢えてテンポとは言わない。) 彼女らはそれで満足らしいが、男からみるとたまらない、何を話題としているのかわからないのだ。

そう言えばこんな音楽を作った人がいたっけ。ヤナーチェク。彼の「ムラディ」などからそんな感じを聞き取る。でもムラディは名作である。バラバラな感じはなく、音楽を聞いた充足感が残る。

モーツァルトは違う。この曲の弦楽パートは弦楽四重奏なみにちゃんと書いてある、と私は思っていた。デベロスマンやセレナードより高度で、全員の意志統一がいる筈である。

3楽章に入ったら音楽に流れが感じられるようになった。全員が共通の目的をもったようである。「これが共通項」というのをお互い感じとったのかもしれない。それは曲が終わるまで続いた。やれやれである。これでいいとはいえない。その共通項が必ずしも満足のいくレベルではなかった。ブラバンと貶すほどひどくはないが、表現のレベルは余り高くなかった。

音だけ聞いていけばいい演奏だったと思うだろうが、音楽を聞こうとした人は裏切られたのではないか。イコチャンが悪かったとは思わない。メンバーの組合せが悪かったのが第一、全員での練習時間不足が第二、これは弦楽四重奏団プラスクラリネットで作るのが普通だから、老練な奏者でないかぎり、たっぷり全員での練習がいるだろう。

クラリネット協奏曲であんなにいい演奏をしたイコチャン。あの名演には指揮者堤俊作氏の功績が存外あったと気づかされた。今後はもっと年配者と合奏をした方がいいし、たくさんの演奏を聞いておく必要があるそうである。

宿泊はイコチャンがとっておいてくれたワシントン・ホテルで、これはなかなかよかった。新しさも広さも十分。ホテルの維持も難しいと思うが、全体的に納得できた。

高崎から白馬へ（8月8日）

先ず先ずの天気ですぐ9時半すぎホテルを離れる。一般道を20分ほど走り、藤岡のインターからのって、平常より車の多い上信越道を走り始めた。この頃から天候がよくなり、あいつく名山の光景が楽しみになる。

ただし掲示板には軽井沢から佐久まで渋滞8キロとある。

先ず遠くに浅間山がみえてきた。進行方向と一致することもあり、白煙がかすかに見える。横川パーキングに近づくと妙義が刻み込まれた剥き出しの山容を急に表す。連合赤軍事件も今日の天気だと連想が薄められる。

列車では見られなかった妙義。赤城、榛名とともに上毛三山といわれながら、長い間姿を見せなかったこの山が、上信越自動車道とともに姿を現わした。初めてみたときの驚きを今も思いだす。

軽井沢をすぎて1車線になったら渋滞である。ここを出る車は多く、半減するほどであるのに。まだ、車の数が多すぎるのか。

実はトンネル内でエンストした車がいた。

8つのトンネルを佐久に抜ける。ここで左手に八ヶ岳連峰が視界を遮るほどに広がる筈だが、今日は駄目。裾野も見えない。

佐久で右折すると下っていた道の傾斜は緩み、視界は広がり右手に浅間山が姿を現わす。運転手だけでなく、陪乗者も気分爽快、歌の一つも出ることが多い。小諸までの直線は最近片側2車線になった。でも老夫婦だけでは歌もでなかった。

予定では東部湯ノ丸サービスエリアで休憩だったが、出口と同じ道に入らねばならないのを知らずに通過、次の千曲川パーキングで一休みした。

ここは千曲川と背景の山に近く、落ち着いた景観である。天気は快晴、日差しは強烈、関東平野の高崎とは別世界だった。不思議なことにトイレだけで自販機もない。

15分は休んだであろう。子供たちの団体がバスを連ねてきたのを潮に車の人となる。この後、4千メートルを越えるトンネル太郎山トンネルと五里ヶ峯トンネルがあり、対面通行と言う運転手泣かせの難所があって何時も緊張する。

トンネルの先で更埴方向とわかれ、すぐ長野インター。インターをでてから暫くの道は、この取り付けそのものに不自然さがあったと思いたくなるように煩雑さである。でて直ぐ国道というわけにはいかない。5分も走ってやっと国道18号にでる。あとは順調、白馬という道標を頼りに走るだけである。

長野郊外を通る道にはオリンピックのために使った跡が歴然と残り、景観と似合わない。道路際には早くも郊外店とよばれる、私のいう街路

の植民地化が起こっている。

道は千曲川の支流犀川沿いを走り、中之条町に入る。この道は国道19号で新宿に至る道であるが、国道らしからぬ近代的なトンネルを幾つもくぐる。やがて白馬方面有料との案内がある。

しかしなかなか有料にならない。行くこと3キロやっとならぬ国道から別れ、有料となった。つまり山にトンネルを掘ったのが有料で、200円とられる。さっきの有料案内の場所は旧道で、あそこなら「無料でいけますよ」という指示だった。

道の駅「中之条」に入る。ここで昼食。近所に縄文の遺蹟があるのが目をひいた。道の駅はどこも小綺麗で現地の特産物の売り場になっている。大抵利用者は多い。場所によっては建設省のばら撒きと批判がでる場所もあるが、ここは成功しているようである。道の駅で食べるものは蕎麦と決めている。

以後県道を走る。ここは戸隠山の裾野に当たる筈だが、かなりの高度にあるせいか、周辺の山が低く感じられる。空は澄んで爽やかである。トンネルが多いのはオリンピック用に作られたせいに違いない。

松本からの道、国道147号にぶつかる。視界が急に広がる。私が

白馬村に足を入れたのは確か初めてである。大町市の青木湖まではきた。

いい年をして、「これが噂の白馬」といった感じが強い。高原が大きい。

通いなれた黒姫高原も広大で、見ごたえはあるが、白馬はそれより一回りも二回りも大きい。

白馬ジャンプ台

長い下りのあと、坂を登る。ジャンプ台周辺の景観は流石北アルプス。

3000メートル級山岳の裾野ではなく、小山を会して平野だが、雄大である。生憎、頂上は見えない。

ジャンプ台は観光地化していた。ヨーロッパではないから、当然ではあるが、国内の観光地は久しぶりなので珍しく感じる。車を駐車場にとめ、ジャンプ台に近づく。ノールウェイのホルメンコルレンのジャンプ台をみたばかりで、比べたくなるが、白馬の方が景観に合っていて好感がもてた。大きく空間を横切る滑降台は緑で、山の傾斜の一部の感もある。

エレベーターで到達した頂上に思ったほどの高さはない。スタート地点まで歩き下を眺めた。予想したほどの恐さもない。ちょっとやって見

たい気持ちが老人でも起こるから若者なら当然だろう。でも冷静にみれば、これは大変な訓練がいる仕事である。雪道を急降下した先は、無であり、空である。引力が適度に働くという保障はない。着地点のはるか向こうに行きはせぬか。

着地用のスペースが余りにも狭く感じられる。

選手がすべりおりる道に勿論雪はないが、人工芝の道とその左に幅30センチほどの白い陶器様のロールが敷かれた道がある。夏スキー大会があると、ヒルの上り口にあったから、人工芝に水でも流し、そこを滑るのだろうと想像した。まあ摩擦が大変、どんなスキーをつかうのやら。それが後から知ったが、滑るのは白い陶器の道の方。これは反磁性体だ。そうで、摩擦軽減が目的。いやはや30センチの細い道を辿るのはそれだけで高度な技術であろう。

ラージヒルのスタート地点からノーマルヒルへと移動しようとした。金網はりの渡り廊下を通り、メインタワーにもどった。階段を5階から2階におりるのだから、エレベーターを使うまでもないと思った。スタート地点から5階までが2階分あるから都合5階下がるだけである。

誤算があった。下り始めてみて、大変な動作作業だというのがわかり

はじめた。5階の次が2階、その間逃げる場所がないのを考えておかなかった。1階が普通のビルの2階分ぐらいある。足を伸ばし、筋肉に刺激を与えない様配慮して下る。途中で限界と思ったが逃げられない。過剰な負担を筋肉に与える結果になってしまった。やっと2階に着く。そこでダウン。エレベーターを使ってやっと1階についた。以後丸1日はこの数分の動作の後遺症になやまされた。軽率な判断だった。勿論ノーマルヒルのスタート地点へは寄らなかった。

着地点にたって、スタート地点を見上げる。滑降斜面の緑には違和感があるが、雄大さに気おされる。アルプスの麓の造形物に相応しい良い出来ではないか。

高校生にジャンプ台を背景に写真を撮ってくれと頼まれた。

美味しくないとソフトクリームを食べて一息し、白馬山麓のジャンプ台から梅池まで走る。駅周辺で一度下まで坂を下りきると自然は急に落ち着きをました。国道に出て、大糸線の森上駅を過ぎ、岩岳スキー場方面を目安に左折し坂を登る。

イギリスのペインさん紹介のペンション「アリスの泉」は梅池の傍で落倉と呼ぶ集落にある。開墾された感じの平地で、山男の好きそうな静

かなただずまいであった。白が基調のペンションで六花舎より一回り大きい。

奥さんは20歳の子持ちと思えないほど若若しく、感じがいい。その趣味の飾りつけが各所にあって、乙女チックであった。それなのに、部屋にベッドの数が多すぎるのが奇妙だった。何せ5台もあったのだから。冬のスキーが盛んなときの名残りだろう。今までは「ボルドー」と言う名でやっていたが、時代に合わないと思い、「アリスの泉」と変えたそう。食堂も風呂場もメルヒェンの主人公がところ狭しとおかれている。本箱も童話である。老人二人、そこで風呂に入り食事をした。

ここも常連の黒姫六花舎同様今日は我々だけだそう。

夕暮れは遅いが、歩くには怖くない時刻で、散歩にでた。周囲には数軒ずつペンションの塊があり、それが5群くらいか。大抵がテニスコートを売り物にしているらしい。若者が去った屋外は人もまばら、散歩にでる人も少ない。静けさが支配し、星も見え始めた。ペンションの前に立ち止まっていると奥さんが出てきて「電気が明るかったかしら」と。この一言は私の彼女への信頼をぐっと増した。

梅池湿原（8月9日）

梅池はもはや白馬村でなく小谷村であるが、落倉のペンションにとっては最高の観光地で、周遊サービス券があった。券をもらってゴンドラの乗り場へ行く。5分も走らないうちに、俗臭フンブンたる梅池高原温泉街についた。駐車代300円をとられ、割引の400円がほぼ消えた。

密閉型のゴンドラは勿論二人だけ、終点まで20分かかる。中間の白樺駅で箱を引張り上げるロープがつがの森からのものに代わる。お客は部屋の中にいたまま。1分強の切り替え時間で、騒音、振動とともに新しいロープに移る。

中間駅を離れると、この駅周辺にはまだ車が多いのに気づいた。つまりここ以下ロープウェイは車の乗り入れを少なくするための対策で作られたと理解した。エコ・ロープウェイと書いてあった理由がわかった。300円とった駐車場に若干腹がたった。

ここから終点までの景色は見通しがいい。前半の勾配はゆるやかだか、後半は高度を稼ぐ目的で、中釣りにされる実感が数度あった。箱の中だから落ち着いていられるが、箱のないリフトならどうだろう。

終点はつがのもりという名で梅林のなかのいい場所である。散策も楽

しめそうだが、さらにロープウェイにのるとなれば梅林を散策する客はない。ロープウェイの箱には定員71名ぎりぎりまで詰めこまれた。ラッシュの電車なみである。景色など見えない。5分間霧の中でみんなじっとしていた。

ロープウェイとゴンドラの違いを思い知らされた。ゴンドラはロープにくくりつけた箱ごと引張りあげられるが、ロープウェイは3本線、両側は線路、中央のロープで上から操作される。急勾配はこの方式に頼らざるをえないらしい。

終点は梅池自然園、高度は1900メートルをこえている。「アリスの泉」は900メートルだったから、30分で1000メートルも昇ったことになる。

いくら空気がよくても、薄いのがから私の無能な肺にいい筈はない。やっとの思いで坂を登ってロッジが集まる、湿原の入り口にたった。入園代は300円。この高地で管理されているのを思うと安すぎる。

湿原は何度か経験があるが、ここは大きい。勾配は無いと聞いていたので、息は大丈夫だろうとたかをくくった。水芭蕉がないから、何が咲いているか、ロッジに書いてあったが、名前は直ぐわすれる。ここの湿

原は同種の花が一斉開花しているようで、面白い。千石原も蓼科もこうではなかった。ここの気象の厳しさを示していよう。適応種が少ないのだろう。最初はワタスゲという可憐な白い花だった。

二つの花の群生地を歩いた。格別に美しくはないが、ここは人の気を落ち着かせるものがある。

今まで経験した最大の湿原だった。いかんせん太陽がない。展望がない。きゅうにガスが広がり、辺りは墨絵の世界となる。

湿原を随分歩いた気がした。一枚板の道を行くだけだから、下を見がちで道に変化がないせいかもしれない。それに見晴らしも十分ではない。ガスと灌木に分断される。

風穴と名づけられた岩石にあいた穴には雪があった。温度計は5度だった。ところどころに巨木が横になり、しかも生きていて、地面すれすれに緑の葉を茂らせていたのが、印象に残る。湿原はお花畑だけでなく、生物の過酷な生き残りの証でもある。高度1500メートル、あらゆる季節を想像すると、ここでは事柄は何と劇的に進んでいることか。

これ以上行くと自分には距離が出すぎ、帰りが危ないと判断して帰路に向かった。別の道を選んだら、折り返し点が出発点に極めて近かった

のに驚いた。往路は円形を8割移動し、帰路は直線で2割移動した程度なのだ。驚いた経験である。ガスと茂みと木道のなせる悪戯、悪意のたましではないが、帰路は楽にという人間の願望が巧みに利用されていた。

木道を歩く人は跡をたたない。こんなに多くの人間がこの大事な湿原で息をしいのか不安に思う。もっとも夏休みのこの日に人が少ないようでは、ゴンドラもロープウェイも動かなくなるであろうが。

木道は厚い一枚板である。幅は30センチ余、長さは90センチを越える。こんな巨木を何処から持ち込んだか、殆んど同じ程度の新しさだから、一度に持ち込まれたらしい。この高度にこんな木があるだろうか。空気の薄いところでの思考はここで止まった。

地上に降りて「アリス」の旦那に聞いたら、ヘリコプターで持ち上げ1ヶ所に集積し、必要な場所へ其処からヘリでまた移動したそう。製材されていた板での移動である。木材事情を思えば当たり前の話である。つまり木が一杯に生えている白馬にカナダの木材が持ち込まれただけに過ぎない。

来たときとは違い、ロッジ周辺は人でごったがえしていた。車椅子できていた人もいた。ここのソフトアイスも美味ではなかった。ブルーベ

リーの紫がどぎつく、しかも膝にたらしてしまい、八重子にお目玉をくった。

樽池にきたのだから、どれが樽池と知りたかったが、聞くのも恥ずかしくて止めた。地図では湿原が池のように書いてあるが、これだと決めかねた。

ロープウェイで降りた終点の樽池林はみな見過ごしていく。ちょっと入ってみた。樽の一斉林であった。異様な落ち着きを感じた。樽林は存外明るいし、疎林のせいか日さえ差す。

そこからのゴンドラは視界もよく、これから行く予定の青木湖も見えた。妙高や黒姫もあるかと見たが、これらは連なる連山に埋没していた。樽池の真東は戸隠でゴンドラの進行方向、黒姫は隠れているか。妙高は見える筈だが。遠くには浅間や八つが岳の様な山影はあった。

樽池高原駅からみると大糸線は500メートルは下だ。大池駅を目指した車は急傾斜の道を走る。周辺には木々が多くなる。駅までおり、姫川に沿って南下し、森上を通過して白馬駅につく。この道はいい。黒姫の麓より、この一帯は開けていない。谷底の感じがするので、道路が落ち着いた感じがする。

昼食は白馬駅近くの中村屋がいいと「アリス」の奥さんに教わったので探した。駅前広場に駐車というのは如何にも田舎的であったし、見つけた中村屋にも駐車場はあったからちょっと間が悪い。ヤエコはてんぷらソバを注文、私はワサビ（山葵）ソバ。山葵の茎が入っただけ。こういった場所では大抵奥さんの方が美味しいものを選ぶ。今度も例外ではなかった。

午後は予定通り姫川水源へいく。飯森、神城を過ぎ、南神城をこえたところに姫川源流があった。白馬では異色のなごやかな雰囲気、湿原はあるものの森の中である。ここにも観光者は後を断たなかった。まあどこも同じと諦めたが、この手の規模の観光地は人が集まったら台無しである。湿原の花は貧しいし、水源地と言う割には水量が多く、これも雰囲気を壊す。水源地の碑にどっかと腰を降ろし、記念撮影。まあこれ以外満足感を示す方法はなかろう。

体が疲れだしたし、天候も怪しくなる。早めに切り上げて歩きだしたら降りだした。10分はたっぷり雨宿り、それ程大きな木もないから地面の濡れ具合を見ながら、木の下から木の下へと移動した。このあと親海湿原へ行く予定だったが、思わぬ雨宿りで気力は薄れ車へ。

来た時の道と違っていたので雨宿りの場所が車の場所と距離感が曖昧で、狐にだまされたと思った程近かった。梅池の湿原と似た経験をまたしてしまった。

30年前の昔話

青木湖は昭和41年8月末にきた。そこは大町市である。梅池という小谷村へ行ったのだから、大町市でも青木湖にも行こうと、妙な決め方をして、車を「アリス」と反対方向に走らせてもらう。というのも青木湖には思い出があるからだ。

昭和41年の夏休みも終わる頃、一人でこの湖へきた。仁科三湖というロマンチックな名の湖の一番奥が青木湖、案内だと、開発は進んでいないとのこと。何故選んだか憶えていないが、神田ロッジという妙な宿舎を選んだ。秋も近かったからお客はいなかった。50歳にはなっていない中年の親父がいて、色々話し込んだ。ここでできるのはボートを漕ぐのと散歩だけ、夜は暇である。残りは親父との話になる。

「善本さん、あしはここに自由に自然を楽しめる施設をつくりたいんだ。ちょっと変わっているのをね。何だっていいんだ。青木湖にくると

変った体験ができるっていう評判が立てば良い。例えばね、夜中に筏をだしてさ、その上にねっころがって月を眺めるとかね」

禿げたガラッパチの親父だった。新島で終戦を迎え、「海の向こうに富士山が見えたのが、本土への憧れでね」と憎めない人だった。不思議なことに記憶にだけ残って、音信は途絶えてしまった。私としては大変珍しいことである。理由はなくはない。それは助教授人事が決まる直前で、滞在中に帰京を要求する電話が南先生からあった。約束を途中で打ち切り帰京。そして東大の大紛争に突入、当局側の当事者になってしまったから、全てが変わった。懐かしさはずっとあったが。

何とその神田ロッジがあったのだ。青木湖は新道から離れ、下に下りていったら昔変らぬ、自然の多い景色のなかに静まりかえっていた。「向こうの家のあるところへつれて行ってよ」と頼み、寂れた村に回りこむ。売店など見当たらないから訪ねる人もいない。どこか車をとめようと、回りこんで坂を登ったら、湖岸に広っぱがあった。止まって一人外にでたら、目のまえに「神田ロッジ、ボート乗り場」という立て札がある。湖岸に専用のボート置場があったのは確かだ。

湖岸に民宿が一つあったが、これは違う。もっこじんまりしたもの

だった筈である。まことに人がいないから、話をきくこともできない。
ぐるっと回って山手の方に行き、左に入ると、なんと「神田ロッジ」と
いう看板の建物があった。建物も一部増築したようだが、昔の面影はあ
った。

増築部は奇異な形の神社風の屋根である。そういえばあの親父は奇怪
な願望をたくさんもっていて、目立ちたがりやだったっけ。玄関の前
には何と石の5重の塔がたっていた。真に親父ピッタリの趣味だ。懐かし
さもあるから親父の顔でも見れば話かけようと思ったが、わざわざ玄関
で声をかけるほどの懐かしさにはもっていなかった。

ガラス戸こしに中をうかがったが人影はなかった。

1966年、もう35年たっている。それなのに、昔のままの民宿だ
けの村で、湖岸の森も少しも損なわれていない。平和である。村は全く
のどか。完全にタイムスリップした感がある。

少し名残惜しかったが、車を回し築場の停車葉経路で「アリス」に向
かった。築場のスキー場が少し綺麗になったようだった。もっとゆっく
り、対岸の森を走るべきだったし、そういう気持ちがあったのに、何故
か早々に引き上げてしまった。何か触れたくないものが現れるのを恐れ

るかのよう。

「道の駅白馬」によって、「アリスの泉」に帰った。4時半だった。

夕食は娘さんが配膳の手伝いをしていた。奥さんより太めだが、かわいいし、雰囲気がいい。高校生とはこうであったかと改めて思う。家庭が円満で、自然が美しいとこんな素直に育つのだろう。これで食事が大分美味しくなった。

今日はお客が5人も増えた。高年の伯父さん伯母さんが5人で、男性2人が女房と寡婦をつれて、神戸から信州巡りをしているという。話かけてくるおっさんも退職者だろう。恒例の旅らしい。老いの過ごし方を一つ教わった。

食後前の森の道に入った。まことに見事な木々である。ここは戦後農家が開拓のためにはいり、十分に基盤整備がなされた。経営に行き詰まり、農業を放棄、整備された道と畑が残った。そのあと都会を嫌った若者が入り込んだ。今10に近いペンションがその空間を利用している。人の移り変わりを知らぬかのごとく、木々は50年を越えて育つたのだ。今蝉時雨と鶯の叫びが激しい。

奥さんの好意で風呂場にはクラシックが流れていた。

ドンピカの快晴と名山（8月10日）

朝、6時10分を8時0分とを読み間違え、「お母さん起きねば」と声をかけ、顔を洗ってから気づいた。逆さに読んだ珍しい事故である。

こうなれば散歩しかない。今日はペンション巡りと洒落込もう。地上は快晴だが、残念山には雲がかかっていた。残念白馬も機嫌が悪い。見えたのは結局1日目の夕方だけだった。

同宿者は早く立ち、我らは9時に支払いを終える。ワインを一本もらった。玄関で記念撮影をしてくれるという。それだけと思ったが、旦那も存外気さくな話好き、30分も夫婦同士のお喋りとなった。

東京田端からこの地への転居は17年前、長男は今20歳というから、子持ちでの移住は英断である。東京からこの地に入り、もとの人格に歳月が多くを加えたことであろう。六花舎の夫婦にも似た尊敬を抱いていたが、アリスの夫妻（曾我さん夫妻）は20歳を頭に計3人の子持ちだから、一層の敬意を払いたくなる。強さと謙虚さと、それに笑顔。ブラボー。

途中スーパー「アップル」により、野沢菜を買う。「アリス」で美味

しかつたので、八重子が売り場を聞いたのだ。それに女房のひんしゆくを買いながら、お盆の落雁も買った。これは自分で食べるため。

9時50分発で一路東京へ。

神城から山道に入ると天気は一層良くなる。白馬曇天が嘘のようだ。

19号を抜け、406号をかすめ、18号に入る。長野インター周辺の

18号交差点までは神城から殆ど直線で、1時間かかった。往路より地形になれていて早い感じがしたが。

18号国道は車も多く、運転者の気が散る。高速道路表示に注意はしていたが、狭い道への急な左折に戸惑い、長野インターに入り損なってそのまま進み更埴までいく。結果論だが、更埴の方がよかった。更埴は松本へ行く長野自動車道にある。

今日はもの凄い、ドンピカの好天で戸隠のとげの山頂もみえた。

ここから東部湯ノ丸までに4千メートルのトンネル二つ。上信越自動車道は大分2車線化が進んでいるが、問題はこのトンネルだけである。抜けて東部湯の丸は近い。行きの失敗に懲り、注意してサービスエリアの入る。

毎度気になる「東部湯の丸」というやぼな名前。東部は町の名前。で

も湯の丸とは？地図でよく調べたら群馬県に湯の丸高原と言う観光地があった。なんと嬭恋村である。そこまで、10キロ、東部、嬭恋線と言う県道がこの出口から走っている。東名高速の横浜町田よりひどい。

八ヶ岳が珍しいほどよく見えたし、佐久の山々が気をひくほどに見えたのは希な出来事である。浅間山もまずまず、空気が澄んでいるから一部雲はかかっても山好きには嬉しい景観の連続である。

帰路の軽井沢付近は空いていた。反対車線が佐久から横川周辺まで渋滞していたのがおかしな程に見えた。こちらは3車線である。1車線貸してやれないものか。現状の固定した道路の仕分けは何時か変える必要が起こるだろう。

横川サービスエリアはそれでも混んでいた。洋食は大変な行列だったが、「おぎの屋（釜飯屋）」は空いていた。勿論釜飯だけではない。チラシをとったら美味しかった。だてに長い間弁当を供給していたわけではないのを知った。

妙義の異様な山容は横川サービスエリアを出て直ぐ間近にある。往路同様赤軍事件は遠く感じられる。それほどに日差しが強い。次は榛名、この道から見る榛名は連山と呼びたくなるほど、山頂が多い。2000

年前の大爆発の様子が偲ばれる。ドンピカの天気でも赤城山は少し霞んでいた。

所沢まで殆ど時速120キロで走った。60歳の女性運転手が若さを感じさせた。

2時半帰宅。休憩も含んで5時間は通り馴れた熱海の平均3時間半より大分違って、やはり遠いようだ。

家は景が整理してくれて綺麗だった。